ISSN 1881-3496

九州大学
大学文書館ニュース

第28号　2006. 9.30

目　次

創刊50周年を迎えた『九州史学』……2
北海道大学農学部附属演習林文書の整理作業経過について……4
九州大学大学文書館名簿……6
受贈図書一覧……6
大学文書館日誌抄録……7

「竹内理三先生還暦祝賀会記念」（1968年６月16日。於太宰府神社文書館）

日本古代史、中世史研究で知られる竹内理三（1907～1997）の還暦祝賀会での集合写真である（前列中央：竹内、右：貞夫人）。竹内は1948（昭和23）年９月～1959（昭和34）年３月、本学の法文学部・文学部国史学第二講座の教授を務めた（竹内と九州史学研究との関係については、本号の中野等「創刊50周年を迎えた『九州史学』」も参照）。その後、東京大学教授、早稲田大学教授、文化功労者、日本学士院会員となり、1996年には文化勲章を受章した。九大時代は彼の40代から50代の初めにかけての時期であり、『律令制と貴族政権』第一・第二部、『平安遺文』等、多くの優れた研究が発表された。写真には九大時代の教え子、同僚達の顔が数多く見える。

創刊50周年を迎えた『九州史学』

中野　等

日本史研究の学会誌である『九州史学』を編集・発行する九州史学研究会は人文学府日本史学研究室に事務局をもつ。2006年8月27日現在で、会員数は435名を数え、このほかに購読機関が90機関に及ぶ。日本史研究の学会としては全国的にみても有数の規模を誇り、堅実な学会運営は斯界の注目するところである。

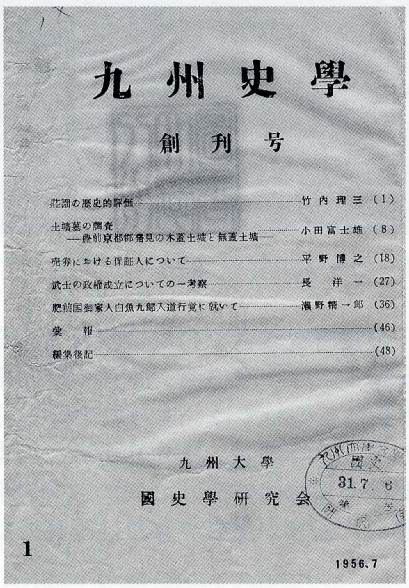
『九州史学』は1956（昭和31）年に創刊され、今年創刊50年目を迎えた。昭和31年6月27日印刷、同年7月1日発行の奥付をもつ創刊号は「九州大学文学部　国史学研究室内　国史学研究会」から発行されている。「国史学研究会」は文学部国史学研究室（当時）の大学院生・学部生からなる「同窓会」的組織であった。創刊号の編集後記には、つぎのようにある。

> 一番大切なこと、それは「研究」といふ点で皆んながまとまることではないか、僕等自身の研究の成果を公けにし、お互いにたゝき合い、援助し合う、更に先輩、先学の忌憚のない批判と指導を受ける、この雑誌がこうしたことのための場としての役割を果すことを僕等は自ら期待している、又そうしたものとして育て上げたいと考えている。

『九州史学』は研究室員相互の学問研鑽の場として創刊されたのである。このころ国史学研究室では久留米藩の百姓一揆に取材した紙芝居の共同制作や、九州の各大学で合同開催する日本史学生セミナーの開催などをおこなっており、こうした学生間の自主的な動きをいわば前史としつつ、「研究会」の立ち上げに至った。国史学研究室のこうした雰囲気の中で生まれた会誌は、当初『九大国史学』と名付けられる予定であったが、当時の竹内理三教授の勧めもあって『九州史学』と改められた。いろいろな意味で同人誌的発想の限界を先見されていたのであろう。しかしながら、この会誌が継続的に刊行される保証はどこにもなかった。創刊に関わった方々は異口同音に「三号雑誌に終わることの危惧」を表されている。その危機を乗り越え、『九州史学』の第10号が刊行された時、竹内理三教授は「『九州史学』第十号を迎えて」と題した巻頭言の中で、つぎのように述べられている。

> 九州史学は十号を重ねて創業の期をすぎたといえるかも知れぬが、学問は幾歳を重ねても、常に創業の期を出でることは出来ない。黄髪の筆者も紅顔の諸君も、常に同じ創業の同一線上に立っているのである。学問創業の意欲がわが国史研究室に失われぬ限り、その発表機関である九州史学はつゞけられるであろうし、つゞけねばならない。この意味で、九州史学は、研究室諸君の自主的なものではあるけれども、関係者の一人として筆者は、盤石の如き責任感に圧倒されるのである。仕事はこれからである。お互に頑張ろう。

ついで、1961（昭和36）年、「国史学研究会」は発展的に解消し、「九州史学研究会」が発足する。この間の顛末は決して順調なものではなかったが、同年6月に発行された18号がその経緯を伝えている。それによると、当時の『九州史学』が単に論文発表のみに終わって、掲載論文の批判検討を通じてお互いに成果を分かち合うまでにはいたっていないとされ、今後は広く九州在住の研究者あるいは九州史関係の研究者のための雑誌へと発展させることが必要であり、さらに『九州史学』を媒介として卒業生その他との連絡を図っていくべき旨が語られている。こうして会員制組織の



『九州史学』創刊号（1956年7月）

「九州史学研究会」が誕生したのである。会員制への移行については、当時の箭内健次教授（文学部国史学）が東北史学会の活動を強く意識されていたことも反映していたようである。また一説には従来の「同窓会」的組織では経済的にも厳しい問題があり、実情は会運営の経済的基盤確立を期したものともいわれている。いずれにしろ、こうして現在につながる「九州史学研究会」が発足した。

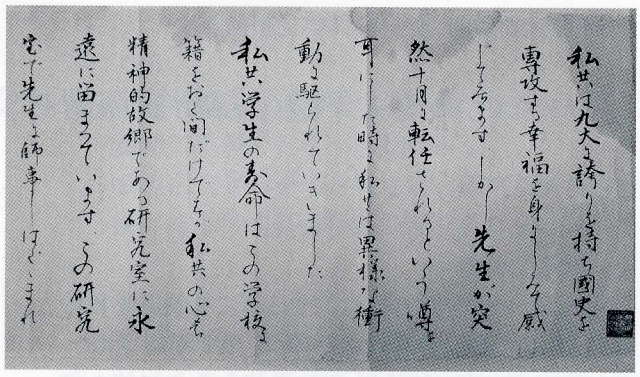
それから程なく20号からタイプ印刷が開始される。当時は年に四号を発行するという建前であった。また「九州史」研究をリードすべき会員制学会誌としての責務から、九州史研究の総括が試みられている。1963（昭和38）年２月発行の21号からは古代史部会の担当として「大宰府研究の成果と課題」が連載された。この企画は中世史・近世史部会へと引き継がれる予定であったが、実際には大会でのシンポジウム企画がこれにかわったようである。以後数年の間、大会は長期テーマ「九州史研究の成果と課題」のもとに開催されることになる。具体的に挙げると、

1964（昭和39）年度大会
「九州中世史研究の現状と課題」
1965（昭和40）年度大会
「九州近世史の諸問題
—幕藩体制成立期の九州の諸問題—」
1966（昭和41）年度大会
「幕末九州史研究の諸問題」

といった具合である。会誌にはその都度こうした記録とともに意見・批判が掲載され、紙面の充実・活性化に大きく寄与していった。のちに会長となられる本学の川添昭二名誉教授（1969年助教授、1975年教授昇任）も、当時を回顧されつつ「今から思うと、このころが（学会活動の）一つのピークをなしている」と述べられている。

すなわち、1967(昭和42)年６月２日九州大学の構内に米軍機ファントムが墜落。程なく、九大も学園紛争の波に襲われることになる。「九州史学研究会」は1968（昭和43）年度大会（10月）こそ実施しているが、会誌『九州史学』については67年10月に41号を発行したのち68年12月に42号を出しているが、つぎの43号が発行されるのは1970（昭和45）年３月のこととなる。この間、学会は全くの機能停止に陥った。

そののちキャンパスには平穏な日々がおとずれることになるが、学会がその機能を回復させるまでにはもうしばらく時間がかかる。紛争前の精力的な学会活動の背後で構造的な財政危機が進行していたが、これに紛争期の混乱が拍車をかけ、既述のように会誌の発行も大きく滞っていった。70年代後半からは、江戸時代の藩政改革よろしく体制再編の時期であった。先輩諸氏の御奮闘の甲斐あって、1980年代に入ると会の財政状況もようやくと好転、学会活動も再び活性化するに至る。ただ、従前とは異なり、会誌や大会報告のなかで「九州史」研究に対する意識というかこだわりはかなり希薄になっていったようである。別の言い方をすれば、研究会としての関心対象が日本史一般へと昇華していったともいえよう。さらに、86（昭和61）年10月の創立（創刊）30周年記念大会は、会期を二日間として一日目に公開講演２本、二日目に研究報告をおこなうという形をとり、1991（平成３）年からはこのスタイルが定着した。また、会誌についても91（平成３）年７月に創刊100号の記念特集号を出し、はじめにも述べたような活況を呈するに至った。



竹内理三教授への留任嘆願書（1958年９月、部分）
『九州史学』の創刊に尽力された竹内教授の東京大学史料編纂所への転出に際し、九大では国史学研究室を中心に留任運動が起きた。

半世紀に及ぶ『九州史学』、「九州史学研究会」の歴史を大雑把に、とくに後半はかなりの駆け足でみてきた。改めていうまでもないことであるが、その道のりは決して平坦なものではなかった。大きな節目を迎えるにあたって、会員・関係者各位のここにいたるご苦労を思うとき、深い感慨を覚えずにはいられない。

創刊50周年を記念して「九州史学研究会」では様々な事業を企画、展開している。とはいえ、それもこれもひとつの通過点に過ぎない。学会の性格やとりまく環境はかわったが、今こそ竹内教授が『九州史学』第10号で披瀝された精神に立ち帰る時であろう。会員はもとより、関係者各位によるますますの御支援をお願いしたい。改めて「仕事はこれからである。お互に頑張ろう。」と自らに銘じつつ、ひとまずは擱筆することとする。

（九州大学大学院比較社会文化研究院教授）

北海道大学農学部附属演習林文書の整理作業経過について

井　上　高　聡

1　文書の移管

北海道大学の演習林は、1901年に札幌農学校の維持資金に編入された基本林として創設され、1907年に農学校が帝国大学に昇格したのに伴って演習林へと改編された。2001年４月には、農学部附属演習林から北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーションへ改組され、名称も研究林となった。現在、天塩・中川・雨龍・札幌・苫小牧・檜山・和歌山の７研究林を有している。1945年までは、樺太・朝鮮・台湾にも演習林も保有していた。

2005年秋から農学部建物の改修工事が始まるため、大学文書館は同年６・７月に農学部内の資料保存場所に出向いて農学部文書の調査を行なった。その際に旧農学部附属演習林文書の一部についても調査した。秋に農学部建物の改修工事が始まり、旧農学部附属演習林文書を保管していた部屋を空ける必要が生じたため、11月に文書を森林圏ステーションから大学文書館へ移管することとなった。３室に保管されていた文書は、ある程度は作成部署別・内容別に区分されて書棚に整理されていたが、長年に渡る文書の出し入れや移動等による錯雑が見受けられた。また、雨漏り等によって破損の甚だしい文書もあった。

大学文書館資料倉庫への文書運び込みは運送業者が行なった。書棚に番号を付し、文書を詰めた段ボールには室番号と書棚番号を記入した。移管された文書は軸状の図面なども含めて段ボール459箱に及んだ。

2　仮目録の作成

文書のリストは作られていなかったので、まずは仮目録を作成する必要があった。文書移管前、2005年７月に、３室のうち１室に保管されていた文書については、書棚に並んでいる順番に機械的に入力していく方法で、大学文書館員２名によって作成していた。

文書移管後、2005年12月から2006年３月にかけて、残り２室に保管されていた文書の仮目録を作成した。資料倉庫で段ボールに詰められた文書を10～20箱程度ずつ内容によって分類整理して、事務室の空き書棚約10棚に並べ、資料整理アルバイト２名が入力をしていった。

作業手順として、まず、仮目録に以下の８項目を入力する。

(1)仮資料番号（５桁の算用数字）
(2)資料作成年、綴込み資料の扱う期間
(3)資料名（基本的に、文書の表紙に記載されている事項をそのまま入力）
　①資料名
　②年・年度・自至
　③部署
(4)作成者（文書を作成した組織等）
(5)資料形態
　文書、図面、冊子など
(6)保存されていた場所・位置
(7)入力日、入力者
(8)備考
　破損状況、内容などの特記事項

文書には一点一点に付箋（約３cm×約30cm）を差し挟む。付箋（横長）には、左側に５桁の仮整理番号と「旧演習林」（資料種別として）、右側に「大学文書館」（資料整理担当部署として）と記す。

移管前に仮目録を作成した文書971点、移管後に作成した文書6521点の計7492点であった（綴体になっていない書類や図面も１点として登録している）。

3　文書の性質

移管された文書は1899－1988年のものである。内容面では大きく分けて、事務関係文書と事業関係文書に区分できる。事務関係文書は他部局と同様、庶務・会計・人事などの演習林の組織運営に関わる文書である。ただし、演習林は学生が所属していなかったので教務文書はほとんど存在しない。

事業関係文書は演習林の事業経営に関わる文書である。演習林では、林内殖民（小作経営）・苗木栽培・官行斫伐・製材・製炭・採鉱などの事業を行なっていた。こうした事業関係の庶務・人事・会計等の文書のほか、生産統計・植生調査・土地測量・天候観測・殖民区画図などの資料も含まれる。

4　文書選別の試行

今回、整理した文書は、「北海道大学法人文書管理規程」が定める保存期間を満了したために移管されてきた文書ではない。北海道大学大学文書館では当面、このような学内に蓄積保管されている文書を整理していかなければならない。今回の作業は、今後行なっていくこうした文書整理の手順や選別の基準を検討するための試行である。選別の試行にあたって取り決めたのは次の２点のみで、そのほかは文書を確認しながら検討することとし、特に選別の基準は設けなかった。

⑴旧制帝国大学以前の文書（～1949年）は保存する。

⑵演習林の事業経営に関わる事業関係文書は保存する。

⑴は、旧制帝国大学以前の時代の文書であるということ自体が、歴史的資料として意味を有すと考えたことによる。⑵は、演習林の経営分析等のために今後も利用される可能性があると判断したためである。

仮目録に登録された順番に、井上が選別を試行した。文書を一点一点見ながら、仮目録への記入事項が適切であるかを確認し、仮目録に選別年月日と選別区分（保存候補○、廃棄候補×、保留△）を書き入れた。別にノートを用意して、選別の判断の理由がわかるように、文書の内容などを簡略にメモし、資料名の訂正等の留意事項も記載した（例えば、『土地使用料減免書類　北海道大学農学部附属演習林本部』は1962年度の林内殖民関係文書綴であるが、ノートには「台風による農作物被害認定書、使用料減免要請など」とメモし、保存候補文書とした）。選別を行なった文書は保存・廃棄・保留それぞれに区別して、再び箱詰めを行ない、仮目録には箱番号を書き入れた。

現時点における、7492点の文書の選別試行の結果は以下の通りである。

保存候補	3416点	45.6%
廃棄候補	4025点	53.7%
保　　留	51点	0.7%

この後、若干の選別試行の再検討と仮目録記載の整理を行なって、以下のような手順を踏む予定である。

⑴大学文書館運営委員会の下に組織する資料保存委員会において選別案を検討する。

⑵北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーションに選別案を提示し、意向聴取を行ない、文書選別を決定する。

⑶大学文書館運営委員会に文書選別の報告を行なう。

⑷文書の廃棄と保存を実施する（保存文書には改めて整理を行なう必要がある）。

⑸保存文書は再整理を行ない、正式な資料番号を付与して資料保存庫に収蔵する

5　まとめ

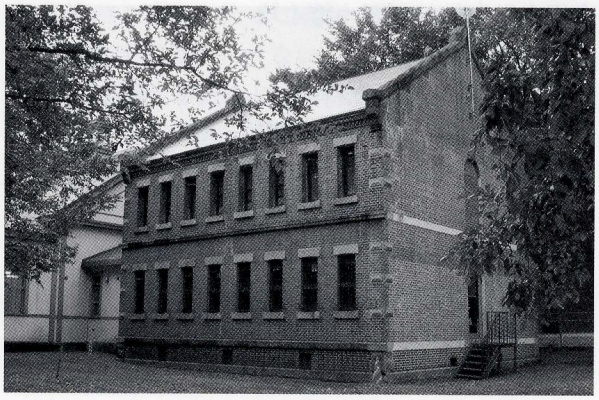
ここまで旧農学部附属演習林文書の整理作業を行なって、作業手順等で多くの反省点や留意点が出た。主なものは以下の点である。

⑴今回は大学文書館のスペースの問題で、文書の内容による整序を十分にできないまま仮目録の作成を行なったので、同じ種類の文書に飛び飛びの仮整理番号を与えることになった。また、仮目録作成と文書選別を別々に行なったため、文書内容の検討が２度手間になった。おそらく、１人で、あるいは２人程度の共同作業によって、仮目録を作成しながら選別を行なっていく方が効率的である。

⑵簿書・ファイル単位で選別を行なうには問題がある場合もまま見受けられる。例えば、厚さ30㎝以上の綴のなかの数件の文書のみを保存したい場合、文書保存上、その文書のみを抜き出した方が有効な場合がある。

⑶⑵とも関わるが、簿書・綴単位で選別を行なう場合、例えば、毎年度１冊づつある『雑件書類』のうち、文書の内容によってある年度のものは保存して、別の年度のものは廃棄するという扱いをして良いかどうか。文書の体系性を考えた場合、「シリーズもの」的な観点も検討する必要もあるかも知れない。

今回の報告では文書整理作業の途中経過しか述べられなかった。別の機会に作業の結果とその検証に基づいて、もう少し詳細な報告をしたいと思う。



北海道大学大学文書館資料保存庫

（北海道大学大学文書館助手）

九州大学大学文書館名簿

館　長	理　事	副学長	有川　節夫
副館長	人環院	教　授	新谷　恭明
専任教員		教　授	折田　悦郎
兼任教員	人文院	教　授	佐伯　弘次
〃	法　院	教　授	植田　信廣
〃	法　院	教　授	熊野　直樹
〃	経　院	教　授	荻野　喜弘
〃	比文院	教　授	有馬　學
兼任事務職員	総務課長		塩田　剛志
〃	法令審議室長		百﨑　義隆
〃	総務第二係長		長戸　謙一
事務職員			山中　一男
事務補佐員			松尾　陳代
〃			筑紫　啓子

（2006年9月1日現在）

受贈図書一覧（2006年1月～2006年6月）

九州大学第一外科百年史
　九州大学医学部第一外科同門会　2005.10
光風霽月―岡田武彦先生追悼文集
　岡田武彦先生追悼文集刊行会　2005.10
九大皮膚科の百年
　九州大学医学部皮膚科教室　2006.5
北海道大学大学文書館年報　第1号
　北海道大学大学文書館　2006.2
緑丘アーカイブ　第3号
　小樽商科大学百年史編纂室　2006.3
東北大学百年史　部局史三
　東北大学百年史編集委員会　2006.3
東北大学史料館紀要　創刊号
　東北大学史料館　2006.3
東京大学史紀要　第24号
　東京大学史史料室　2006.3
東京大学史史料室ニュース　第36号
　東京大学史史料室　2006.3
金沢大学資料館だより　No.26～No.27
　金沢大学資料館　2005.8、2006.3
金沢大学資料館紀要　第4号
　金沢大学資料館　2006.3
名古屋大学大学文書資料室ニュース　第20号
　名古屋大学大学文書資料室　2006.3
京都大学大学文書館研究紀要　第4号
　京都大学大学文書館　2006.3
京都大学大学文書館だより　第10号
　京都大学大学文書館　2006.4
大学論集　第36集～第37集
　広島大学高等教育研究開発センター　2006.3
東北学院資料室　Vol.5
　東北学院　2005.12
近代日本研究　第二十二巻
　慶應義塾福沢研究センター　2006.3
福澤研究センター通信　第4号
　慶應義塾福沢研究センター　2006.3
駒大史ブックレット5「図書館誌」にみる駒大図書館史　その1
　駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室　2006.3
成蹊学園史料館資料集②　学園各学校の日誌・日記等
　成蹊学園史料館　2006.3
拓殖大学百年史研究　17号
　拓殖大学創立百年史編纂室　2005.12
玉川大学教育博物館館報　第3号
　玉川大学教育博物館　2006.3
成瀬記念館2005　No.20
　日本女子大学成瀬記念館　2006.2
武蔵八十年のあゆみ
　武蔵80年のあゆみ編集委員会　2005.9
武蔵学園史年報　創刊号～第九号、第十一号
　武蔵学園記念室　1995.7～2003.12、2005.12
大学史紀要　第十号　尾佐竹猛研究Ⅱ
　明治大学史資料センター　2006.3
明治大学史資料センター事務室報告　第二十七集
大学史資料の新活用
　明治大学史資料センター事務室　2006.3
早稲田大学史記要　第三十七巻
　早稲田大学大学史資料センター　2005.12
神奈川大学史資料集　第二十二集　神奈川大学会議録（七）
　大学資料編纂室　2006.3
愛知大学小史　六十年の歩み

愛知大学小史編集会議　2006.2
研究所報　第47号
大谷大学真宗総合研究所　2005.10
大谷大学真宗総合研究所研究紀要　第23号
大谷大学真宗総合研究所　2006.3
新島研究　第97号
同志社大学同志社社史資料センター　2006.2
立命館百年史紀要　第十四号
立命館百年史編纂委員会　2006.3
立命館百年史　通史二
立命館百年史編纂委員会　2006.3
龍谷大学史報　Vol.6
龍谷大学大学史資料室　2006.3
桃山学院年史紀要　第二十五号
桃山学院史料室　2006.3
桃山学院の歴史
桃山学院史料室　2006.4
関西学院史紀要　第十二号
関西学院学院史編纂室　2006.3
西南学院史紀要　Vol.1
西南学院百年史編纂諮問委員会　2006.5
アーカイブズ　第21号～第23号
国立公文書館　2005.9、2006.1、2006.3
アーカイブズ・ニューズレター　No.3～No.4
国文学研究資料館　2005.9、2006.3
国文学研究資料館紀要　アーカイブズ研究篇
第2号
国文学研究資料館　2006.3
大学アーカイヴズ　No.34
全国大学史資料協議会東日本部会　2006.3
アーカイブズ学研究　No.1～No.2
日本アーカイブズ学会　2004.10、2005.3
野間研だより　No.19
野間教育研究所　2006.2
DJIレポート　No.65
国際資料研究所　2006.1

＊大学史・高等教育史、アーカイブ関係図書を中心に受贈図書の一部を掲載した。

大学文書館日誌抄録（2006年1月～2006年6月）

1.18（水）ソウル大学校教授、資料調査のため来館（～20日）。
1.20（金）日本大学文理学部専任講師、資料調査のため来館。
1.31（火）日本放送作家協会九州支部より資料調査のため来館。
2.2（木）第1回創立百周年記念事業専門委員会開催（折田教授出席、第2回3月27日も同様）。
2.7（火）大学院人文科学府学生、資料調査のため来館（2月14日、15日、4月25日も同様）。
株式会社ビッグベン・JCOM福岡より取材のため来館（3月10日、5月26日も同様）。
2.10（金）岩城志郎氏（水泳部ＯＢ）、来館、資料寄託。
2.14（火）川添昭二名誉教授（九州大学五十年史執筆者）にオーラルヒストリーを実施（第3回。有馬學教授、折田教授。第4回3月29日、第5回5月9日、第6回6月13日も同様）。
2.17（金）早稲田大学教育学部教授、資料調査のため来館。
2.24（金）折田教授、「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」研究会に参加（～25日。於広島大学文書館）。
2.28（火）広島大学より大学文書館視察のため来館。
3.13（月）友枝敏雄大学院人間環境学研究院教授より資料寄贈。
折田教授、「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」研究会に参加（～14日。於沖縄県公文書館）。
3.17（金）愛媛大学より大学文書館視察のため来館。
医学部同窓会史料・史跡保存委員会開催（折田教授出席、4月28日も同様）。
3.22（水）池田善朗氏来館、資料寄贈（5月15日も同様）。
3.24（金）読売新聞社より取材（工学部の歴史

の件)。
3．31（金）『九州大学大学史料叢書』第14輯、『九州大学大学文書館ニュース』第27号刊行。
4．3（月）山中一男氏（前農学部事務長補佐）再任用。
4．4（火）徳島新聞社より電話取材（大学改革等の件)。
4．6（木）九州工業大学附属図書館史料室より資料調査のため来館（4月25日も同様)。
4．12（水）2006年度前期「大学とはなにか—九州大学を通じて考える—」開講。
4．13（木）熊本学園大学大学院学生、資料調査のため来館。
4．18（火）第4回九州大学大学文書館委員会開催。
4．21（金）田代英雄名誉教授来館、資料寄贈。
産経新聞社より電話取材（「自校史」教育の件)。
4．25（火）河宇鳳全北大学校教授一行、大学文書館視察のため来館。
4．27（木）楠原浩一大学院医学研究院助教授より資料寄贈。
船木和夫大学院システム情報科学研究院教授より資料寄贈。
4．28（金）平成18年度大学文書館予算要求書提出。
5．2（火）大学院工学研究院助教授、資料調査のため来館。
5．10（水）折田教授、「新キャンパスを科学する」（個別教養科目）の一環として「九州大学史と新キャンパス」を講義。
大学院人間環境学府学生、資料調査のため来館（5月18日、6月23日も同様)。
5．12（金）中山宏明名誉教授来館、資料寄贈（6月30日も同様)。
大学院工学研究院地球資源システム工学部門より資料寄贈（5月25日も同様)。
5．25（木）大学院工学研究院応用化学部門より資料寄贈（6月14日も同様)。
学務部入試課より資料寄贈。
5．29（月）山田直九州大学ロンドン事務所長より山川健次郎初代総長関係資料寄贈（梶山千里総長受領)。
5．30（火）武藤軍一郎名誉教授来館、資料寄贈。
5．31（水）朝日新聞社より東京裁判パール判事来学の件につき照会、回答。
大学院工学研究院エネルギー量子工学部門より資料寄贈。
大学院システム情報科学研究院電気電子システム工学部門図書室より資料寄贈（6月19日も同様)。
6．2（金）大学院工学研究院教授、資料調査のため来館。
6．5（月）旭正一産業医科大学名誉教授来館、資料寄贈。
6．6（火）九州史学研究会より資料調査のため来館。
6．12（月）日本電波ニュース社より写真資料の件につき照会、資料送付。
6．15（木）大学院工学研究院教授、資料調査のため来館。
6．16（金）本部記者懇談会（折田教授、山川総長関係資料の寄贈の件につき紹介)。
6．19（月）北海道大学より資料調査のため来館（～22日)。
6．21（水）名古屋市立大学大学院学生、資料調査のため来館（～23日)。
6．29（木）アジア総合政策センターより取材のため来館。

九州大学大学文書館ニュース　第28号
Kyushu University Archives

発行日　2006年9月30日（年2回刊）
編集
発行　九州大学大学文書館
〒812-8581 福岡市東区箱崎6－10－1
電話・FAX　(092) 642-2292
印刷　株式会社ミドリ印刷